

論文要約

題目：共産党期安部公房文学の研究

氏名：糸賀寛

本研究の目的は、先行研究で言及の少ない共産党期における安部公房（一九二四年～一九九三年）の作品の典拠とその権力描写の特徴を明らかにすることである。なお、共産党期とは、公房が共産主義に接近した一九四八年から党除名が発表された一九六二年を指す。

公房の経歴や研究動向を概観した序章に続き、第一章では、典拠解明の手掛かりとなる安部公房の鑑賞歴を概観し、ルイス・キャロル、フランツ・カフカ、花田清輝、石川淳といった、彼が好んでいた作家の鑑賞歴を述べた。公房が生涯愛していた作家の内、フォードル・ドストエフスキー、ジャン＝ポール・サルトル、ベルトルト・ブレヒト、マーク・トウェイン、魯迅、椎名麟三は、先行研究での言及が少ない。その他、共産党時代にのみ言及の多い作家として、ダンテやシェクレイ、マヤコフスキーなどを取り上げたほか、マルクス主義思想文献、およびルイス・ブニュエル、アンリ＝ジョルジュ・クルーゾー、チャップリンといった映画監督やその作品についても可能な限り列挙した。

第二章では、短篇小説「デンドロカカリヤ」（一九四九年八月『表現』）を取り上げ、植物病のモデルがヒステリーであることを指摘した上で、植物病がヒステリーと同じく権力による抑圧によって発症し得ると推測した。そして、このことを裏付けるべく、本文で引かれるギリシャ神話に着目した。まず、神話の典拠が、中島孤島編『神話伝説大系第四巻 希臘羅馬篇』（一九二七年二月近代社）とジェームス・ボールドキン著・杉谷虎蔵訳・中島茂一編『増補縮刷 希臘及北欧神話』（一九一九年一〇月富山房）であることを示し、その後、引用されるギリシャ神話を、神が人間を変身させる契機となる第一パターンと、神が植物した人間をモニュメントに変える第二パターンとに分類した。第一パターンにおいては、神＝権力者からの圧迫が植物化の原因となっていた。また、コモンの植物化描写からも、権力による抑圧が植物病のトリガーとなっていることが確認できた。続いて、抑圧がどのような形態で行われているのかを、ダンテ・アリギエーリ『神曲』を参照して読解した。本作で引かれているのが、生田長江訳『神曲』（一九二九年八月新潮社）であることを確認した上で、権力者の行う抑圧が、人々が自ら植物化を選ぶよう誘導する形をとっていると指摘した。続いて、権力者の寓意である植物園の園長の行動を分析し、彼が、巧言令色によって人をコントロールしようとしたり、反権力者を見世物にしたりしており、言語やモニュメントを使って人々を抑圧していると論じた。最後に、極悪の植物という意味を持つデンドロカカリヤの含意を分析した。コモンを含む植物病患者が反権力的傾向を持っていることを明らかにした上で、暴力的に権力者へ抗う点が園長＝支配者にとっての悪であり、一人で支配者に挑戦する点が大衆運動における団結を乱す点で民衆にとっての悪であると分析し、デンドロカ

カリヤは、支配者と被支配者、双方の不利益を象徴していると論じた。

第三章では、一九五三年発表の戯曲「少女と魚」（一九五三年七月『群像』）を取り上げ、『竹取物語』、馬場睦夫・松村武雄編『神話伝説大系 第二巻 印度・波斯篇』（一九二九年五月近代社）に収録された「マハーバーラタ」のカルナの逸話、ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』、小川未明「人魚と赤い蠟燭」が典拠であること、および日本昔話に頻出の二元対立構造が取り込まれていることを指摘し、従来は指摘の少なかった日本民話やインド神話といった東アジア・南アジアの文芸が活用されていることを示した。その後、典拠との相違点に着眼して、資本家の悪意と強大さ、および大衆の弱さが描かれていることを指摘し、本作においても「デンドロカカリヤ」同様に民衆と支配者の両者への批評が見られることを論じた。

第四章では、一九五〇年代に公房が発表したカニバリズムを扱った作品の典拠を論証した。一

九五〇年発表の短篇「事業」（一九五〇年一〇月『世紀群5』）の主典拠は夢野久作「人間腸詰」^{にんげんそうせえじ}

（一九三六年三月「新青年」）・フロイト「トーテムとタブー」であり、前掲「少女と魚」の人肉食に関係する場面は芥川龍之介「河童」（一九二七年三月『改造』）に拠っていた。また、短篇「人肉食用反対陳情団と三人の紳士たち」（一九五六年一月『新日本文学』。以下、「陳情団」と略）は、ジョナサン・スウィフト「貧家の子がその両親並びに祖国にとっての重荷となることを防止し、且社会に対して有用ならしめんとする方法についての私案」を素材にしていることも指摘した。公房は、カニバリズム・モチーフによって権力者の悪意や、被支配者との価値観およびコミュニケーションの断絶性を描いていたが、この手法は、マルクス『資本論』が人肉食によって資本家の悪徳を強調した点に類似していると指摘した。また、古今東西のカニバリズム文学が、極限状態の人間心理を描いた作品、常識の不確かさや価値観の違いを描いた作品、人間の残虐さを描いた作品の三種に大別できると論じた後、三番目の種目では、社会批判が行われることが多いと述べた。公房文学は第三の種目に属するが、他作品と異なり、被支配者側の心理や支配者との対決が描かれる点が個性的であると論じた。

第五章では、短篇「鉛の卵」（一九五七年十一月『群像』）を取り上げ、エドガー・アラン・ポー「ミイラとの口論」を素材とすることや、描写の一部にはフランク・ライマン・ボーム『オズの魔法使い』が用いられていることを明らかにした。また、「デンドロカカリヤ」で用いられたモチーフが再利用されていたことも指摘した。その他にも、葉緑素と赤血球の構造的類似性やルイセンコ科学といった自然科学の知識に加え、左翼系の知識人においては科学と見られていたマルクス主義の知見が盛り込まれていたことも論証した。公房は、寓話を描くために突飛な設定を用いることがよくあり、本作も、緑色人という奇抜な存在が登場することから、寓話と読める。科学描写を綿密にすることは、作品にリアリティを付与し、現実味のある思考実験という印象を読者に与える効果を持つ。寓意には様々なものが想定され、一義に定められないため、本論では、その内の二つを提示した。第一に、愚鈍な大衆と狡猾な支配者という寓意があると解釈した。緑色人は自身が閉じ込められていることに気付かず、権力者のどれい族を支配できていると考えているが、それは誤りであり、彼らの愚かしさを強調している。また、緑色人の棲む世界は共産主

義的だが、それにも拘らず、彼らは労働をせず、日々を怠惰に過ごしており、そのことが批判精神の減退に繋がったと論じた。ここから、「鉛の卵」では、共産主義的ユートピアから労働が消失したことを想定した思考実験がなされており、大衆と支配者の関係を寓すると同時に、労働の意義が説かれていると結論付けた。第二に、科学の危険性という寓意を示した。本作では、政治に利用されたり、予期せぬ副作用を齎したり、科学技術の負の側面が描かれていた。

第六章では、ミュージカル「可愛い女」（一九五九年六月季刊『現代芸術』）を取り上げ、本作に登場する金貸し、泥棒、泥棒集団、その頭目、刑事が、それぞれ銀行資本家、労働者、会社、産業資本家、国家を擬したものだと論じ、金貸し・頭目・刑事がシンジケートを結成するまでの流れは、ウラジーミル・レーニン『帝国主義論』などマルクス主義文献を踏まえていることを明らかにした。また、カール・マルクス『資本論』を参考に、可愛い女が剰余価値を寓した存在であり、彼女によるシンジケート結成の補助は、欲望に基づいた組織化を寓意すると解釈した。一方、本作に登場する、「泥棒通信」なる新聞の発行者が共産党を模した存在であること、および、彼の大衆の組織化は、人々の生活状況を無視した思想一辺倒なものだったために失敗したことを指摘した。これらの内容から、公房は日常的な欲望を基礎とした組織化を評価していたと結論付け、資本家の繁栄という共産主義者からすると皮肉な結末を用意することで、共産党の組織化を批判していたと解釈した。

第七章では、戯曲「石の語る日」（一九六〇年一二月『世界』初出・一九六一年三月『テアトロ』決定稿）を取り上げ、安保闘争のルポである岩田統一「新安保阻止に立ちあがった群馬の業者たち」（一九六〇年七月『世界』）を典拠としていることを示した。公房のエッセイ「芸術的課題と政治的課題の統一」（一九六一年一月パンフレット『俳優座 日曜劇場一〇』）に拠れば、本作は、安保闘争失敗の原因を大衆組織理論の欠如に見出した上で、大衆運動において必要とされる組織理論について分析した作品であった。これを踏まえ、民衆の自発的な運動を公房が評価したことを前提に、本文の内容を分析した。そして、第一に階層を越え、第二に経済的利益に基づき、第三に危機によって紐帯が一層強化される、という三要素に基づいた組織化が、本作で理想視されていたと結論付けた。

第八章では、公房の代表作『砂の女』（一九六二年六月新潮社）を取り上げ、作品における知識人の表象を明らかにした。まず、デフォー『ロビンソン・クルーソー』が典拠であることを示し、それとの差異から、本作において科学知識に焦点が当たっていることを示した。その後、知識人である主人公と科学の結びきを明らかにした上で、彼の行った発見および彼が発見と思っている事柄を「発見」として概括し、主人公が環境に支配される存在から環境を作り変える存在に変容したと論じた。加えて、作品の舞台がダンテ『神曲』の地獄をモデルにしていることを赤化にすることで、主人公が地獄の責め苦を受けていると解釈した。都会人の一員として無自覚ながら田舎を搾取していたこと、および、知識人として村の人間を見下していることが、本作における主人公の罪であったと考察した。最終的に、男は「溜水装置」を開発し、砂地を湿潤な土地へ変質する可能性を獲得したが、それによって彼のいる場所が地獄ではなくなったこと、および「溜水装置」が村人からの賞賛を得られる可能性があったことが、作品のラストで脱出をとり止めた

理由だったと結論付けた。また、「溜水装置」は、男だけでなく、村人の生活をも改善し得るもので、男は意図していないものの、村にとっても救いとなることが想定される。よって、メタ的に読めば、「溜水装置」の開発は、村人に対する男の贖いと取ることもでき、男の罪は無自覚に贖われたと読解できる。

第九章では、共産党期公房文学における、権力と民衆の描写の分類・検討を行った。前期において、権力者は民衆を説得する者として姿を現し、おためごかしや相手側の瑕疵の誇張などによって、人々を自らの都合がよいようにコントロールしようとしていた。それに対し、民衆は単独で権力に立ち向かえないことが強調されている他、集団行動によって権力者を脅かす場面が存在するなど、団結の重要性が示されていた。一方、「R 6 2 号の発明」（一九五三年三月『文学界』）におけるロボット人間の暴走や、「陳情団」のストライキなど、暴力は大衆と強く結びついており、言説と関連の深い支配者と対比的である。共産党後期に入ると、権力者が対座して市民を説得することはなくなり、大きなシステムによる支配が前面に押し出されるようになった。最も分かり易いのは「鉛の卵」に登場する「どれい族」の支配で、彼ら作りあげた支配体制は、その隠匿性の高さから「緑色人」に気付かれぬ。このように、後期においては、システムが巨大化・不可視化したために、民衆が支配の実態に気付かなくなっている。他方、大衆の組織化が題材とされることが増え、作品の描写やエッセイの記述によれば、公房は、政治問題と生活問題の結合や、複数の小集団が折衝に基づく下からの組織化を重視していたと言える。前後期を問わず、政治による科学の利用というモチーフが度々登場している。支配者は、科学理論の援用によって自らの主張を正当化したり、科学技術を用いることで強固な支配体制を築いたりしていたのだった。更に、監禁モチーフも頻々に使われている。監視や追跡とセットで登場するこのモチーフは、権力による抑圧と結びついていた。こうした公房の権力モチーフは党除名後の作品にも見出すことができ、公房文学全体を見通す上で、無視できない重要なファクターと言える。

また、補論において、公房の諸作品とエドガー・アラン・ポーの影響関係を論じた。「異端者の告発」（一九四八年四月『次元』）は「ウィリアム・ウィルスン」を、「どれい狩り」（一九五五年七月『新日本文学』）は「ちんば蛙」を、「第四間氷期」（一九五八年七月～五九年三月『世界』）は「ヴァルデマア氏病症の真相」を、「手段」（一九五六年一月『文芸』）と「こじきの歌」「こじきの歌」（一九五八年二月中部日本放送、同年四月文化放送、初出は一九六一年七月『現代芸術』）は「実業家」を、「誘惑者」（一九五七年六月『総合』）と「愛の眼鏡は色ガラス」（一九七三年一二月新潮社）は「タア博士とフェザア教授の治療法」を、それぞれ素材とすると考えられる。また、ポーの摂取や作品への言及から、彼が、ポーに見られる欺瞞や幻覚のモチーフ、および仮説の設定という発想法に関心を寄せていたことを明らかにした。